The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	英，米，日の廉価本の表紙デザインの研究と比較
Author(s)	天野，史哉
Citation	デザイン理論. 2015, 65, p. 96-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56410
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

英，米，日の廉価本の表紙のデザインの研究と比較

天野史哉／大阪工業大学大学院工学研究科空間デザイン学専攻

１．はじめに

廉価本は1809年にドイツでタウヒニッツ版というペーパーバックが初めだとされている。しかし，現在に続く廉価本の多くは1930年前後に登場するものが多い。初期の廉価本は各国特徴的なデザインを行っていたが，時がたつにつれて類似した点が増える。

この現象に国際間の影響がどのようにみられるか，廉価本が登場した1930年頃から変化が多く見られる1960年までを一区切りとし，1930年頃に登場した廉価本が現在に続いている，イギリス，アメリカ，日本について考察する。

２．イギリスのペーパーバックについて

イギリスでは1936年に出版されたペンギンブックスがイギリスにペーパーバックを定着させたとされている。デザインは「水平グリッド」と呼ばれるフォーマットを利用していた。水平三つの段で表紙を分割し，上段に社名，中央に書籍情報，下段にロゴマークを配置しており，イラストや写真を利用しないデザインとなっていた。このデザインはドイツのアルバトロス社のペーパーバックの影響を受けており，判型や文字中心のデザイン，色による分類分けなどがその点だとされる。

1952年になると新たに「垂直グリッド」と呼ばれるフォーマットを利用し始める。この垂直グリッドはイラストを使うことを念頭に置いたデザインとなっており，垂直に３分割し，中央に木版画調のイラストを配置するデザインである。このフォーマットになった理由は，まず自社の製品が多くなり区別のため。もう一つが，パンブックスやパンサーブックスなどの他社の台頭である。パンブックスは1947年から本格的な出版活動を開始した出版社で，ペンギンと異なり初めからイラストを大きく使うデザインを行っていた。

このパンブックスなどに押される形で新たなデザインへと変わることになる。1957年には，フルカラーのイラストを大きく使ったデザインを行ったが，コストの関係上１年足らずでやめることとなった。1961年になると，前と同じくイラストを大きく使うデザインを採用しつつ使う色を分類分けの色を基調とすることによりコストを抑えることに成功した。その後1960年後半になるとフォーマットを利用しない担当したデザイナーが自由にデザインへ行えるようになった。

イギリスはフォーマットを利用して，イラストや写真を使わない堅いデザインから，徐々に自由なデザインへと変化していった。

３．アメリカのペーパーバックについて

アメリカは商業的な思考が強く，流行モチーフやテイストを使う傾向がある。1939年に初めてペーパーバック専門出版会社であるポケットブックスができたのが，アメリカのペーパーバック始まりとされている。そのデザインは初めからカラーのイラストを前面的に使い，一冊ごとに違うデザインをおこなっていた。これは当時流行していた読み物雑誌であるパルプマガジンなどの影響である。

1942年頃になると，シュールでシンボリックなイラストが流行し始める。その他にポケットブックスが行っていたメダリオンフォーマットというデザインから派生した，

壁の穴や割れた窓などを通し向こうの空間，風景が見えるといった構図の覗き穴デザインも多く見られた。

1948年頃になるとリアリスティックなイラストが流行し始める。これは当時流行していたハードボイルド小説やお色気小説などと組み合わさりエロティックで刺激が強いデザインとなっていった。しかしこの流行は1952年に米国下院議員で問題にされるなどし，自粛する流れとなった。

その後アメリカのペーパーバック業界は，今までのイラスト中心の考えから，アートディレクションを使った構成も考慮に入れてゆくようになった。

アメリカは初めから大きくイラスト使ったり，作品ごとに独自のデザインをしたりと，初期から自由なデザインをしていた。その後，アメリカの特徴であるイラストを使用しつつ，徐々にデザイン性が増していったといえる。

４．日本の文庫本について

日本では，1927年に岩波文庫が刊行され，文庫本が日本に定着した。岩波文庫はドイツのレクラム文庫を模倣していることは有名である。模倣している点は，星マークによる値段の表示や，表紙のレイアウトの点も模倣しているように思われる。レクラムと岩波では，枠縁のデザインが最も異なる点であり，アールデコ調とアールヌーヴォー調となっている。岩波がアールヌーヴォー調のデザインを行っていたのは，デザインを行った平福百穂が，正倉院の古鏡をもとに描いたデザインをしたからである。この他に岩波は，色帯により分類分けをしたり，パラフィン紙をかけるなどした。そうしてこの岩波のスタイルが後の文庫本に多大な影響を与えており，多くの文庫本が，クリーム色の地に，木版画調の植物を取り入れた模様，枠縁を使うなど岩波と似たデザインが多くを使われていた。

この岩波スタイルの流行が終わるのが文庫本に表紙がかけられる様になってからである。カバーがかけられるようになったのは，1951年に角川文庫の『ニーチェ全集』にて，２色刷りのカバーが採用された。その後，1955年には新潮文庫のサガン著『悲しみよこんにちは』にてカラーカバーがかけられていた。1960年代になると個別カラーカバーは普及していった。

５．考　　察

初期のデザインはどの国も，国外から影響を受けつつ，自国の要素や自国らしさを出し，特徴的であった。1950年頃になるとイラストを利用していなかったイギリス，日本がイラストを取り入れるようになっている。イギリスのペンギンブックスがイラストを取り入れる理由の一つであったパンブックスは，最初からイラストを大きく使う点や，使われているイラストのテイストがアメリカの流行を少し遅れて追うなど，アメリカのデザインを取り入れたデザインをしていたのである。このアメリカ様式を取っていたパンブックスに押され，ペンギンブックスはそれまでのスタイルを変え，イラストを取り入れたデザインを行うようになっていったのである。これはアメリカのペーパーバックがイギリスの様式に影響を与えたことは間違いないでしょう。

では日本の場合はどうかというと，1950年までは岩波スタイルが多く見られ英米の影響はあまり見られない。カバーがかけられるようになってもデザイン的影響はあまり文庫本には見られなかった。

こうして比べてみるとやはり同じ言語圏の英米は目に見えて影響が見られるが，独自の言語圏である日本の文庫本には影響が少なかったと思われる結果となった。